愛媛大学教育学部紀要　第70巻　128-136　2023

『竹取物語』におけるかぐや姫の手紙の比較

（国語教育講座）清田　朗裕

A Comparison of Kaguya-Hime's letters in *The Tale of Bamboo Cutter*

Akihiro KIYOTA

（2023 年 9 月 1 日受付、2023 年 11 月 28 日受理）

キーワード：手紙（letter）、比較（comparison）、竹取物語（*The Tale of the Bamboo Cutter*）

１．はじめに

国立教育政策研究所教育課程研究センター（2007）によれば、「古典嫌い」の生徒は古文 72.6%、漢文 71.2%と 7 割を超える。この結果は、古典そのものに対する生徒自身の興味・関心の薄さや、訓詁注釈に留まる教師主導の一方向的な授業形態等の影響を予想させる。

一方で、勝又編（2019）、長谷川他編（2021）、内藤一志・菊野雅之（2021）等のように、古典教育に関するシンポジウムが開催され、活発な議論が交わされた。そこでは、古典教育の意義が問い直される中で、新たな古典教育を望み、今後に期待する人々が多く存在することが顕在化した [1]。2021 年には、同志社大学古典教材開発研究センターが設立された。そこでは、「古典教材の未来を切り拓く！研究会」（通称コテキリの会）が開催され、和本やくずし字等を積極的に活用した古典教材を提案しつづけている [2]。また、それと呼応するかのように、2021 年 8 月には、くずし字翻訳アプリの「miwo[3]」が、2023 年 8 月には、テキストをくずし字画像化する「soan[4]」が公開された。このように、古典（和本）と現代を結ぶ ICT ツールが充実してきており、GIGA スクール構想とも相俟って、学校教育において和本リテラシー[5] を獲得しやすくなった。つまり、2020 年代は、新たな古典教育の可能性を開きやすくなった時代だといえる。

２．往来物を活用した学習へ「繋げる」段階の必要性

それでは、古典教育について、文部科学省はどのように考えているのだろうか。以下、本稿に関わるところのみ取り上げる。

文部科学省（2019）は、高等学校国語の新設科目「古典探究」の言語活動例の中に、「往来物」という資料群を取り上げている [6]。

往来物とは、書簡（手紙）の模範文例集や単語集といった、当時の教科書とでもいうべき、実用的な文章のことを指す。近世の寺子屋等では、子どもたちが『庭訓往来』『商売往来』等の往来物を通じてリテラシーを学び、将来の仕事に役立てて

いた[7]。

文部科学省（2019）は、そのような往来物を言語活動例の中で取り上げていることから、古典においても、実用的な文章を教材として活用した学習を求めていると考えられる[8]。つまり、これまで取り上げられてこなかった、特に古典文学以外の古典資料を積極的に活用することが求められているのである[9]。

しかし、以前の学習指導要領[10]に基づく高等学校国語の教科書は、往来物を取り上げていない。そのため、往来物を通じて、生徒にどのような資質・能力を育成できるか、実践例が不足しているといわざるをえない[11]。そのため、実践の蓄積・検証が求められるが、一朝一夕にできるものではない。それでは、どのような単元を、どのように構築していけばよいだろうか。

このことを考えるうえで、文部科学省の国語科に対する見方・考え方を確認しておきたい。

文部科学省（2019 : p.13）は、「国語科の指導内容は，系統的・段階的に上の学年につながっていくとともに，螺旋的・反復的に繰り返しながら学習し，資質・能力の定着を図ることを基本としている」と述べている。つまり、ある特定の学年だけで学習が終わるのではなく、前後の学年の指導内容と関連させつつ、学習を広げ、深め、定着を図ることが求められているのである[12]。そして、このことは、指導内容だけではなく、文章ジャンルにおいても当てはまるものである。

この文部科学省（2019 : p.13）の見方・考え方を、往来物を活用した学習にも当てはめるならば、小学校・中学校・高等学校を通した古典学習の最後の科目である「古典探究」において、初めて実用的な文章の往来物が取り上げられることになるのは、系統的・段階的な学習が考慮されておらず、唐突であると考えられる[13]。

それを解消するためには、これまで活用されてきた（古典教育）教材を工夫しながら、往来物との連携を図っていく段階（単元）が必要である。

３．往来物を活用した学習への架け橋

それでは、往来物を活用した学習へ繋げるため、どのような教材を構想すればよいだろうか。

ここで参考にしたいのが、現代文における手紙教材の扱い方である。現代文では、直接間接問わず、「手紙」が活用されている[14]。

たとえば、文学的な文章として、小学校ではアーノルド・ローベル「お手紙」（『新しい国語二下』東京書籍等）、中学校では向田邦子「字のない葉書」（『国語』光村図書等）、高等学校では夏目漱石「こころ」（『文学国語』筑摩書房等）等において、手紙は、作品解釈上、非常に重要な道具として用いられている。

実用的な文章においても、感謝の気持ちを伝えたり依頼を行ったりする単元や資料のなかで、手紙が取り上げられている（『新しい国語四上』東京書籍等、『国語 1』光村図書等、『現代の国語』第一学習社等）。

このように、現代文では、文学的な文章を扱った学習にも実用的な文章を扱った学習にも、「手紙」が活用されている。このことを古典にも当てはめるならば、書簡の模範文例集を含む往来物は、実用的な文章であることから、現代文におけるお礼の手紙や依頼文等と同列のものとして考えられる。しかし、一方で、文学的な文章において、書簡（手紙）は、作品中にはみられるものの、これまで中心的な学習課題として着目されてこなかったようである[15]。そのため、表 1 に示したように、明確な位置づけはなされていない。

以上のことを踏まえると、古典において、往来物の学習を行う前に、手紙が作品上重要な道具として活用されている文学的な文章を教材として取り上げることで、系統的・段階的な学習が可能になると考える。

表 1　現代文と古典における手紙の扱い

	文学的な文章	実用的な文章
現代文	お手紙、字のない葉書、こころ等	お礼の手紙、依頼文等
古典	明確な位置づけなし	往来物 模範文例集

本稿は、以上のような問題意識をもち、文学的

な文章の中で手紙が登場する作品を取り上げる。具体的には、『竹取物語』「かぐや姫の昇天」で、かぐや姫が翁と帝に対して手紙を送る場面に着目する。

古典ではどのような手紙が認められているか、文学的な文章を通して読解する単元を設けておくことで、その後、当時の人々の生活に紐づいた実用的な文章である往来物を活用した単元へと接続しやすくなることが期待される。

４．研究目的

本節では研究目的を述べる。

本稿の目的は、系統的・段階的に往来物を活用した単元を構想していくための一助として、文学的な文章の中にみられる手紙文を分析し、その後の教材分析に資する言語的資料を提供することである。

具体的には、『竹取物語』における、かぐや姫が認めた翁（・嫗）と帝への手紙に注目し、そこにみられる表現を比較し、かぐや姫の心情がどのように描かれているかを明らかにする。

繰り返すが、古典の文学的な文章の中で手紙文を取り上げておくことで、今後、往来物を活用しやすくなることが期待できる。

５．調査資料

本節では調査資料を述べる。

本稿では、『竹取物語』のうち、「かぐや姫の昇天」と題される場面を取り上げる。本文は、『精選古典Ｂ【改訂版】』（三省堂、平成29年2月28日文部科学省検定済）から引用する。現代語訳は、片桐洋一他校注・訳（1994）を参考にし、適宜稿者が訳出した。

６．調査方法

本節では調査方法を述べる。

本稿では、「かぐや姫の昇天」場面における翁（・嫗）と帝への手紙を、文法的・文体的観点に着目して比較・考察を行う。結論を一部先取りすれば、別れの場面における手紙という点では共通するものの、自分を育ててくれた翁（・嫗）に対する手紙と、自分を見初めた帝に対する手紙は、対照的に描かれていることが明らかになった。

主な比較の観点は、以下の通りである。

A)　文末表現の特徴　　【文法的観点】
B)　文章数と一文の長さ　　【文体的観点】

７．調査結果

本節では、調査結果を述べる。まず、翁（・嫗）への手紙の分析結果を述べ、次に、帝への手紙の分析結果を述べる。

７．１．　翁（・嫗）への手紙

本節では、翁（・嫗）への手紙を取り上げ、その内容・表現を整理する。

かぐや姫が翁（・嫗）へ手紙を認める場面は、以下の通りである。手紙の文面は、文番号を記し、ゴシック体で記す。

> 竹取心惑ひて泣き伏せる所に寄りて、かぐや姫言ふ、「ここにも、心にもあらでかくまかるに、昇らむをだに見送り給へ。」と言へども、「なにしに、悲しきに、見送り奉らむ。我をいかにせよとて、捨てては昇り給ふぞ。具して率ておはせね。」と泣きて伏せれば、御心惑ひぬ。「文を書き置きてまからむ。恋しからむ折々、取り出でて見給へ。」とて、うち泣きて書く言葉は、
>
> **「①この国に生まれぬるとならば、嘆かせ奉らぬほどまで侍らむ。②過ぎ別れぬること、かへすがへす本意なくこそおぼえ侍れ。③脱ぎ置く衣を形見と見給へ。④月の出でたらむ夜は、見おこせ給へ。⑤見捨て奉りてまかる、空より落ちぬべき心地する。」**
>
> と書き置く。
>
> （『精選古典Ｂ【改訂版】』：p.37）

「心惑ひて泣き伏せる」翁に、かぐや姫が「御心惑」い、「うち泣き」「文を書き置」く場面である。会話部分だけでなく、地の文からも、翁とかぐや姫の昂ぶる感情が描かれている。

以下、文法的観点、文体的観点からかぐや姫の

手紙を整理する。

７．１．１ 文法的観点

本節では、文末表現を取り上げる。翁（・嫗）に対する手紙の文末表現は次の通りである。

① 侍らむ 【終止形】
② 本意なくこそおぼえ侍れ 【已然形】
③ 見給へ 【命令形】
④ 見おこせ給へ 【命令形】
⑤ 落ちぬべき心地する 【連体形】

終止形（①）・連体形（⑤）・已然形（②）が 1 例ずつ、命令形が 2 例（③・④）みられた。

まず、終止形終止の①を取り上げる。この文は、「この国に生まれぬるとならば」と順接仮定条件を表す接続助詞バが前件にあり、後件は「侍らむ」という意志の助動詞ムの終止形で文が終止する。ここは、ご両親様を嘆かせ申し上げない時（翁・嫗が死ぬ）まで私はずっとお仕えすることもいたしましょう、というかぐや姫の意志を表している。だが、実際には、かぐや姫は月の住人であり、地上界の人間ではないので、傍にはいられないのである。なお、前件の内容が実際とは異なる条件のことを「非現実仮定」（山口 1980）という。平安時代の文法としては、特徴的な形式に反実仮想（反事実条件文）を表すマシがあるが、この例では、前件の内容と後件の内容から、反実仮想の解釈が認められる。

次に、已然形終止の②を取り上げる。この文は、「本意なくこそ」とコソがあり、「おぼえ侍れ」という已然形で結んでいることから、係り結びが成立している文である。コソは「本意なく」を卓立させており、かぐや姫は、翁と別れることが「不本意である」ことを述べている。

次に、命令形終止の③・④を取り上げる。「見給へ」「見おこせ給へ」は、「（脱いでおく私の着物を形見としていつまでも）御覧ください」「（月が出た夜は、私の住む月をそちらから）見てください」と訳される。命令形について、現代語では「見ろ」「しろ」といった形式は、上位者に対して用いることはできないが[16]、古典語では、尊敬の補助動詞「給ふ」の命令形で表せる。これは古典語における命令形が、上下関係の別なく行為要求を表せることによる。つまり、現代語訳にもあるように「-（て）ください」と訳すことができるということである。したがって、かぐや姫は、翁に対して、突き放すように命令したわけではなく、離ればなれにならなければならないこの現状を嘆き、月へ還った後も、脱ぎ置いた衣を自分だと思ってほしい、月の出る夜は思い出してほしい、という愛惜の思いを込めている。

最後に、連体形終止の⑤を取り上げる[17]。ここは、「心地す」と終止形で文を終止してもよいところである。しかし、連体形終止であることから、体言止めと同様の表現効果をもたせており、余情が認められる。つまり、この一文は、かぐや姫が余情を持たせていることを踏まえて解釈しなければならない。

以上、かぐや姫の翁（・嫗）に対する手紙を文法的観点から取り上げた。その結果、非現実仮定を伴う意志や、命令形による行為要求、係り結び、連体形による余情表現と、多様な文末表現がみられた。

７．１．２ 文体的観点

本節では、翁（・嫗）への手紙を文体的観点から確認する。具体的には文章数と一文の長さに着目する。

翁（・嫗）への手紙は、前節でみたように、5 つの文章で構成されている。一文の長さを数えると、表 2 の通りである。

表 2 翁（・嫗）への手紙の文字数と文末形式

	文字数 (字)	割合 (%)	文末 形式
①	28	25.93	終止形
②	27	25.00	已然形
③	13	12.04	命令形
④	17	15.74	命令形
⑤	23	21.30	連体形
合計	108	100	―

かぐや姫が翁（・嫗）に認めた手紙の総文字数は 108 字であった。5 つの文で構成されている。

各文の文字数の平均は、21.6 文字であった。中央値は 23.0 字であった。文末の活用形が命令形である③・④の文が 10%台だった。

以上、かぐや姫の翁（・嫗）に対する手紙を文体的観点から捉えると、5 つの文章から構成されており、合計 108 文字であることが分かった。

７．２．　帝への手紙

本節では、帝への手紙を取り上げ、その内容・表現を整理する。

かぐや姫が帝へ手紙を認める場面は、以下の通りである。手紙の文面は、文番号を記し、ゴシック体で記す。

> 天人の中に持たせたる箱あり。天の羽衣入れり。またあるは、不死の薬入れり。一人の天人言ふ、「壺なる御薬奉れ。きたなき所のもの聞こし召したれば、御心地悪しからむものぞ。」とて、持て寄りたれば、いささかなめ給ひて、少し形見とて、脱ぎ置く衣に包まむとすれば、在る天人包ませず。御衣を取り出でて着せむとす。その時に、かぐや姫、「しばし待て。」と言ふ。「衣着せつる人は、心異になるなりと言ふ。もの一言言ひおくべきことありけり。」と言ひて、文書く。天人、「遅し。」と心もとながり給ふ。かぐや姫、「もの知らぬこと、なのたまひそ。」とて、いみじく静かに、おほやけに御文奉り給ふ。慌てぬさまなり。
>
> 「**⑥かくあまたの人を賜ひて、とどめさせ給へど、許さぬ迎へまうで来て、取り率てまかりぬれば、口惜しく悲しきこと。⑦宮仕へ仕うまつらずなりぬるも、かくわづらはしき身にて侍れば、心得ず思し召されつらめども、心強く承らずなりにしこと、なめげなる者に思し召しとどめられぬるなむ、心にとまり侍りぬる。**」とて、
>
> **今はとて天の羽衣着る折ぞ**
> **君をあはれと思ひ出でける**
>
> とて、壺の薬添へて、頭中将呼び寄らせて奉らす。
>
> （『精選古典Ｂ【改訂版】』: p.38）

「心もとながり給ふ」と天人が急かすものの、かぐや姫は「いみじく静かに」「慌てぬさまなり」と、悠然とした様子で、帝に手紙を書き置く場面である。以下、文法的観点、文体的観点からかぐや姫の手紙を整理する。

７．２．１　文法的観点

本節では、文末表現に着目する。各文の文末表現は次の通りである[18]。

⑥　悲しきこと。　　【体言止め】
⑦　とまりはべりぬる　　【連体形】

まず、「悲しきこと」（⑥）を取り上げる。形式名詞「こと」を伴い、体言止めになっている。⑤の連体形終止と同様に余情表現と捉えられる。「残念で悲しいことですよ」と、かぐや姫が残念に、悲しく思っていることが述べられている。

しかし、その一文全体をみると、「とどめさせ給へど」の箇所では「～が（けれども）」と訳される逆接確定条件のドが、「取り率てまかりぬれば」の箇所では「～ので」と訳される順接確定条件のバが用いられており、共に確定した内容を述べており、説明的な文であることがわかる。

次に、連体形の「とまりはべりぬる」（⑦）を取り上げる。この文は、「（心強く承らずなりにしこと、）なめげなるものに思し召しとどめられぬるなむ」と係助詞ナムがあり、「心にとまり侍りぬる」という係り結びが成立している。ナムは、「（帝がかぐや姫のことを）無礼な奴めとお心におとどめなさっていること」の部分を卓立させている。つまり、帝に無礼な者だと思われ続けてしまうことが、かぐや姫の「心にとま」っていることであることが明らかになっている。

以上、かぐや姫の帝に対する手紙を文法的観点から取り上げた。その結果、体言止めによる余情表現及び係り結びがみられた。また、文中には、確定条件を表す表現がみられた。

７．２．２　文体的観点

本節では、帝への手紙を文体的観点から確認する。具体的には文章数と一文の長さに着目する。

帝の手紙は、前節でみたように、2 つの文章で構成されている。一文の長さを数えると、表 3 の

通りである。

表 3 帝への手紙の文字数と文末形式

	文字数（字）	割合（%）	文末形式
⑥	53	37.59	体言止め
⑦	88	62.41	連体形
合計	141	100	―

かぐや姫が帝に認めた手紙の総文字数は141字（和歌除く）であった。2 つの文で構成されている。各文の文字数の平均は、70.5 文字であった。2文であるため中央値も70.5字であった（表 3）。

以上、かぐや姫の帝に対する手紙を文体的観点から捉えると、2 つの文章から構成されており、合計 141 文字であることが分かった。

8．考察

本節では、前節までに得られた結果を基に、手紙に描かれたかぐや姫の心情について考察を行う。

前節まで、翁（・嫗）と帝への手紙について、文法的観点、文体的観点を取り上げた。それらをまとめると、次のようである。

まず、翁（・嫗）への手紙の場面では、翁の懇願に対し、「御心惑ひて」「うち泣きて」と、かぐや姫の感情的な姿が描かれている。その状態で認められた翁（・嫗）への手紙は、5 つの短文が平均21.6 文字で連ねられている。命令形終止の文を 2 例用い、畳みかけるようにお願い（行為要求）している。加えて、順接仮定条件バを用い、翁・嫗の今後の生活、すなわち「未来」を案じていることが窺える。かぐや姫の愛惜が伝わる手紙である。

一方、帝に対する手紙はどうだろうか。天人が急かすなか、かぐや姫は冷静な態度で帝への手紙を認めている。人間の心を失っていない理性的な姿が描かれている。帝への手紙は、2 つの文が平均70.5 文字で述べられている。体言止め、連体形終止の余情表現はみられるものの、述べている内容は、これまで伺候しなかった非礼を詫び、帝が遣わした警護に対する感謝を述べつつも、月の住人であるために人間界に残れないのだ、というものである。翁への手紙とは対照的に、確定条件のドやバを用いて、自身の「過去・現在」に対する帝への謝罪や感謝を長々と説明している。

以上、同じ「別れ」の手紙を認める場面だが、その表現内容は対照的であることが窺える。かぐや姫の、翁と帝に対する思いの強さの差が明確にみえてくる。ここまでをまとめると、表 4 のようになる。

表 4 翁（・嫗）と帝に対する表現差異

比較項目	翁	帝
文字数	少ない	多い
文の長さ	短い	長い
文の数	多い	少ない
文末表現の種類	多い	少ない
態度	感情的	理性的
表現	愛惜	謝罪・感謝
志向	未来	過去・現在

このように、手紙に込めた思いが、対照的であることが読み取れる。

特に帝に対しては、従来、帝へ贈った和歌に示されるように、「君をあはれと思ひ出でける」という気持ちは、かぐや姫の人間らしさや帝と心を通わすものと解釈されている（斉藤 2020、岡田 2021 等）。しかし、翁（・嫗）への手紙と比較すると、必ずしもそうではないことが読み取れる。

それでは、この点について、どのように考えればよいだろうか。ここでは、帝に対するかぐや姫の態度から考察を加えたい。

別れの場面であるのに、かぐや姫は過去や現在に対する謝罪・感謝を「説明的に」述べている。これは、帝に対する思いよりも、月に還ることを致し方ないことである、と正当化しているようにみえる。

それでは、なぜ、月への帰還を正当化しなければならないのだろうか。それは、翁（・嫗）には何の落ち度もないことを訴えなければならないからではないだろうか。裕福になったとはいえ、翁は地上界の住人であり、帝に仕える存在である。帝も、かぐや姫が翁の傍にいるからこそ、翁に職

位を与えていた。しかし、かぐや姫が月に還る今となっては、翁の将来は不安定なものになる。そのため、かぐや姫は、翁（・嫗）に対しては、衣や月を眺めさせることで、親子関係が継続していることを示し、帝に対しては、これまでの非礼の理由を述べ丁重に詫び、和歌を添え、形見を贈ることで、誠意を表し、自らの月への帰還について、翁に責任はないことを暗に示しているのではないだろうか。

以上、本稿では、『竹取物語』「かぐや姫の昇天」場面にみられる翁（・嫗）と帝への手紙にみられる文法的観点・文体的観点の比較を通して、かぐや姫の心情を明らかにした。

９．おわりに―今後の課題―

本節では、今後の課題を述べる。

町田（2020）は、現行の学習指導要領[19]では、「比較」の観点が重視されていると述べている。

本稿は、往来物を活用した教材開発に向けた一助として、かぐや姫の手紙を取り上げ、翁（・嫗）と帝への手紙の比較を行った。この比較により、かぐや姫の心情により深く迫ることができた。

このことから、古典教育の中で往来物（実用的な文章）を取り上げる際にも、単独で取り上げるのではなく、異なる手紙と比較させつつ取り上げることで、効果的な学習に繋がるのではないかと考えているが、まだ十分に検証できていない[20]。

本稿で得られた知見をもとに、今後、複数の手紙文を取り上げるなかで、往来物も取り上げ、それらの比較を行う教材開発を進めたい。

【付記】

本稿は、「『竹取物語』「かぐや姫の昇天」にみられる手紙の表現差異」と題し、「第141回全国大学国語教育学会世田谷大会（オンライン）」で発表した内容に基づく。発表時、ご質問くださった方々に感謝申し上げます。

なお、本稿はJSPS若手研究20K13999の研究成果の一部である。

註

[1] 一方で、学校教育の優先順位という観点から、古典教育に価値や意義を見出せない人々がいることを、現実問題として受けとめなければならないことも露呈している。古典教育の価値や意義を問い続けることが求められる。

[2] 「古典教材の未来を切り拓く！研究会（コテキリの会）」自体は、2020年9月13日に第1回研究会が開催されている。

[3] 人文学オープンデータ共同利用センターHP「みを（miwo）：AIくずし字認識アプリ」（http://codh.rois.ac.jp/miwo/、最終閲覧日2023/08/28）

[4] 人文学オープンデータ共同利用センターHP「そあん（soan）」（http://codh.rois.ac.jp/soan/、最終閲覧日2023/08/28）

[5] 「和本リテラシー」については、中野（2011）参照。

[6] 文部科学省（2019）は、「往来物」を次のように捉えている。

> 往来物とは、往復書簡（往来）の形式を採った文例集に由来しており、中国の影響を受けながら、『十二月往来』などの書簡の文例を示したものや、『庭訓往来』などの書簡形式を採った単語集など、近代以前に我が国で独自に発展していった日常生活に必要な実用知識を示したものである。漢文の名句・名言などは、例えば、『論語』、『孟子』、『菜根譚』、『言志録』などにみられる。
>
> 【清田註：中略】
>
> また、往来物や漢文の名句・名言などに用いられている文体などの表現の仕方の特色を捉え、中心となる思想などがどのように表現されているかを理解するとともに、描写や語調などの特徴にも留意しながら、感想や考察したことを随筆などにまとめる活動は、書くことを通して読む能力を高めることにも結び付く点で重要である。
>
> （文部科学省2019：p.269）

[7] 八鍬（2023：第3章、第4章）参照。

[8] 実用的な文章の扱いについては、文部科学省（2019：pp.96-97）等参照のこと。

[9] 往来物の活用については、清田（2020）も参照のこと。

[10] 文部科学省（2008）参照のこと。

[11] 現行の学習指導要領に基づく往来物を活用した実践として、大元理絵（2018）がある。

[12] 「系統的・段階的、螺旋的・反復的な学習」という観点は、国語科における言葉による見方・考え方の育成を図るうえで、重要である。

[13] 古典における非文学的な文章としての論理的な文章としては、たとえば本居宣長『玉勝間』（『高等学校改訂版標準古典B』第一学習社）等が取り上げられている。しかし、それは『徒然草』のような、それまでの学習で取り上げられている古典文学作品に対する評論であり、その点において、文学的な文章と関連づけられている。

[14] 田近・井上編（2013：p.143）では、「教科書では，「書くこと」の小教材として，手紙を中心にした系列が設けられている。学習者の関心や意欲を大切にし，他教材や総合と関連付けるなかで手紙を生かすために，単元学習として手紙文を書く活動を位置づけてもいいだろう（清田註：三好修一郎執筆）。」とある。

ただし、向田邦子「字のない葉書」は、手紙の書き方を学習する単元ではない。その意味で、手紙を扱った単元すべてが「書くこと」の領域に含まれるわけではない（「字のない葉書」は、「読むこと」の領域であると考えられる）。

本稿で取り上げる「かぐや姫の昇天」場面における手紙も、「読むこと」の単元として活用されることを想定し、翁と帝の手紙を比較する。

[15] 本稿で取り上げる『竹取物語』「かぐや姫の昇天」場面は、以前の学習指導要領である「古典B」全21種類中12種類において採録されている。そのうち、帝への手紙を学習の手引きの中で取り上げたものは2種類（『新編古典B』東京書籍、『高等学校 改訂版 標準古典B』第一学習社）、本稿で検討する帝と翁両方の手紙を取り上げたものは2種類（『新 高等学校古典B』『新 精選古典B古文編』ともに明治書院）であった。ここから、「かぐや姫の昇天」場面自体は、半数以上の「古典B」で採録されつつも、手紙を学習の手引きとして取り上げているものは少なく、あまり注目されていないことが窺える。

[16] 尊敬語を用いても「御覧しろ」とはいえない。

[17] 連体形終止は、擬喩述法（山田 1908）ともいう。

[18] 本稿では2文に区切った説を採用しているが、帝への手紙の文の区切り方は諸説ある。片桐校注・訳（1994：pp.74-75）では、「かくわづらはしき身にてはべれば。」「心得ず思しめされつらめども。」と、本稿では文を続けているところを区切っている。また、『高等学校 改訂版 標準古典B』（第一学習社）では、「かくわづらはしき身にて侍れば。」（pp.23-24）の部分を区切っている。

[19] 町田（2020）時点では、新学習指導要領のことを指す。

[20] 匿名の査読者から「ICTやデジタルの世界に住む「学ぶ側」の反応」がないとの指摘を受けた。「「学ぶ側」の反応」については、現在愛媛大学附属高等学校国語科教員の協力を得て、複数回授業を行い、研究を進めているところである。「ICTやデジタルの世界」への対応の仕方については、今後の課題としたい。

参考文献

大滝一登・髙木展郎編著（2018）『新学習指導要領対応　高校の国語授業はこう変わる』三省堂

岡田香織（2021）「不死の薬に託されたかぐや姫の思い」三宅晶子編『もう一度読みたい日本の古典文学』勉誠出版

大元理絵（2018）「古典の意義や価値を探究する」大滝一登・髙木展郎編著『新学習指導要領対応　高校の国語授業はこう変わる』三省堂、pp.99-103

勝又基編（2019）『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』文学通信

片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子校注・訳『新編日本古典文学全集12　竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語』小学館

清田朗裕（2020）「往来物は古典教育にどのような形で活用できるか―学習指導要領における往来物の位置づけを踏まえて―」『国語と教育』

46、pp.49-62
国立教育政策研究所教育課程研究センター（2007）「平成 17 年度高等学校教育課程実施状況調査 教科・科目別分析と改善点（国語・国語総合）」（国立教育政策研究所教育課程研究センターHP、https://www.nier.go.jp/kaihatsu/katei_h17_h/h17_h/05001000040007001.pdf、最終閲覧日 2023/08/28）
斉藤みか（2020）『『竹取物語』から「かぐや姫」へ―物語の誕生と継承』東京堂出版
田近洵一・井上尚美編（2013）『国語教育指導用語辞典　第四版』教育出版
内藤一志・菊野雅之（2021）「古典の学びを国語科教育学はどのように捉えるのか」『国語科教育』90、pp.3-4、全国大学国語教育学会
中野三敏（2011）『和本のすすめ――江戸を読み解くために』岩波書店
長谷川凜他編（2021）『高校に古典は本当に必要なのか』文学通信
町田守弘（2020）『国語教育を楽しむ』学文社
三宅晶子編（2021）『もう一度読みたい日本の古典文学』勉誠出版
文部科学省（2008）『高等学校学習指導要領（平成 21 年 3 月告示）』（国立教育政策研究所教育課程研究センターHP、erid.nier.go.jp/files/COFS/h20h/chap2-1.htm、最終閲覧日 2023/08/28）
文部科学省（2019）『高等校学習指導要領（平成 30 年告示）解説国語編』東洋館出版
八鍬友広（2023）『読み書きの日本史』岩波書店
山口堯二（1980）『古代接続法の研究』風間書房
山田孝雄（1908）『日本文法論』宝文館出版